

「受難の始まり」

先週の水曜日から、キリスト教の暦では「受難節」と呼ばれる期間に入りました。この受難節は、私たちが日常の忙しさからちょっと距離を取り、内面を見つめ直すことを目指します。十字架の上で死なれたイエス様の苦しみの道なりに思いを馳せながら、自分の過ちや社会の不正義に心を留めます。それは、後悔や懺悔という下向きの姿勢を伴うものですが、同時に「こうだったら良かったな」という「あるべき理想」を思い描くという点では、上向きの積極的な態度でもあります。

受難節の初日の水曜日は、「灰の水曜日」と呼ばれ、「悔い改め」と「謙虚さ」を促す日です。こ敦賀教会ではしませんが、教会によっては、灰の水曜日に、信徒さんの額に灰を塗る儀式が行われます。この儀式の意味は、私たちがいずれ土や塵に帰る存在であることを思い出し、神様の前で謙虚に歩む決意を新たにするため、ということです。額に塗る灰は、過ぎし日々の自分の過ちや弱さを表し、悔い改めを通して新しい生を得るための準備とされます。また、イエス様が荒野で 40 日間の断食と祈りを行ったという今日の聖書箇所を重ねて、私たちも信仰を見直し、神様との交わりを深める時期として、受難節に臨むよう促されています。具体的な過ごし方としては、この期間、私たちは贅沢や自己中心的な生活から離れるよう心しつつ、神様の御言葉に耳を傾けることの大切さを再認識します。そして、自らの弱さや罪深さを受け入れ、悔い改めの心を持つことで、イエス様の御復活に向けた準備を整えていきます。受難節、灰の水曜日の説明としては、こんなところでしょうか。キリスト教における「自己反省」という行いを、とくに強く意識するのが受難節であり、灰の水曜日ということです。

先ほども言いましたが、この「自己反省」と言うのは、「あるべき理想」があって初めてできるこ

とです。お手本がなければ、自分の過ちや無様さに気付くことはできません。キリスト教と言うのは、自分の生活の中に、この「お手本」を意識するように取り組む営みだとも言えます。自分の生き方に「お手本」がある。だから、時々、自分の生き方を振り返って「お手本」と見比べてみて、「ああ、あの時、こうしておけば良かったな」とか「ここのこれを、もうちょっとこうしたら、お手本のようになれたかな」とか、そんな風に反省するわけですね。それは、ある一面では、とても面倒臭く、窮屈な生き方かも知れません。けれど、「お手本」や「あるべき理想」を心に留めながら生きること、私たちはきっと平和と調和を実現させる一人として、社会に貢献できるのだろーうと思います。もちろん、自分の幸せや充実を守りながら、ですけどね。私たちは、神様やイエス様ではないので、どんなに社会への貢献を追い求めても、自分を犠牲にして自分と他者を幸せにすることはできません。そういう意味では、イエス様の十字架上の死とは、私たちにとって究極の「お手本」であると同時に、絶対に辿り着けないゴールでもあります。「私には絶対にできない方法で、世の人々に尽くされた」というイエス様の生き様に驚き、感謝することも、この受難節に必要な姿勢だと言えるでしょう。

今日の聖書箇所は、「私には絶対にできない方法で、世の人々に尽くされた」イエス様の、その最初のご経験を記すものです。

今回の聖書箇所における「悪魔」またの名を「誘惑する者」と呼ばれる存在は、現代的な感覚から言えば、幻想と言えるでしょう。極限状態に置かれたイエス様が見た幻覚とも表現できます。ただ、象徴的な意味でこの悪魔を捉えるなら、それはとても魅力的な存在である、ということです。

「悪魔が魅力的」なんて言うと、ギョッとしますが、もしも本当に人に害をなす悪魔なんてものが存在するなら、その見た目、振る舞いは、絶対に魅力的です。何故なら、その方が悪さをしやすいから。明らかに悪そうな輩に、人は付いて行ったりしません。初見で危ないと分かるなら、自ら進

んで首を突っ込むことも無いでしょう。最も危険で有害なのは、それと分からない形で、私たちの近くに存在していることです。しかも、賢く柔和そうに佇んでいます。ここで言われている「悪魔」とは、そういう厄介な存在の象徴なのです。

そして、この賢く魅力的に見える悪魔が登場した時、イエス様は 40 日間断食していたと言います。「まあ、イエス様だったら 40 日食べなくても平気でしょう」とも思えるのですが、私たちも絶食して 2 か月ほどは生存可能だと言われています。しかし、「空腹を憶えられた」と書かれている辺り、さすがに少なからず不満と苦痛を感じられたと推察されます。この時、イエス様は人間的かつ身体的な意味で「欲望に駆られていた」ということです。悪魔の誘惑というのは、難しい説話や議論を伴うようなものではなくて、至ってシンプルに、それでいて、抗い難い形で引き起こされます。「身体が食べ物を欲している」「とても、とてもお腹が減った」。身体が求めるものである以上、理屈も言い訳もできません。最初の悪魔の誘惑はそのような形でした。この誘惑に対してイエス様は、旧約聖書の申命記 8 章 3 節に書いてある御言葉でもって対抗しました。「人はパンだけで生きるものではない。神の口からでる一つ一つの言葉で生きる」と。この引用された箇所だけを見ると、「ご飯も食べずに聖書の御言葉だけで生きて行けるのか」という素朴な疑問もあり得ますが、引用元の申命記 8 章を読んでみると、神様による十全とした御守りの下、人は衣食住を守られ、健康も支えられて生きてきたことが書かれています。なので、最初の誘惑に対してイエス様が言った御言葉には、「神様の言葉があれば腹は減らん」というのではなく、「お腹が減ったけど、神様が食べるものを必ず備えてくださるから、おまえのは要らない」というメッセージなんですね。ここでイエス様は「信仰によって空腹の苦しみを克服した」のではなくて、この誘惑されている状況下でも、神様の恵みに希望を置いたということです。聖書には書いていないことですが、きっと、この後、イエス様はパンを十分に召しあがったんじゃないかと想像します。

第二の誘惑は、権威と自尊心に関わるものでした。神の子イエスに自尊心なるものが相応しいのか、とも思われるのですが、最初の誘惑と同じく、イエス様は、この荒れ野へ来たのは、私たち人間と同じ苦しみを味わうためでした。イエス様は、私たちの苦しみを知り、私たちに寄り添うために、私たちと同じ経験をされようとした。飢えや渇きも、権力や称賛への憧れも、私たちがそれを感じたら、イエス様も「じゃあ私もそれを感じてみようじゃないか」と、誘惑を受けられたのでした。なので、第二の誘惑においても、確かにイエス様は心に葛藤を抱いたのだと思います。この第二の誘惑とは、ようするに「神様を試してみたい」ということです。言い換えるなら「神様がいるか、どうかを疑って、確かめてみる」という。だから、これは「神殿から飛び降りる」という大それた形じゃなくても、常日頃、起こりえることです。試すことも、確かめることも、それは「疑い」から生じるものです。極論を言えば、不幸に遭い、思い通りの生き方が出来ない時、ふと「神様っているのかしら」と考えるだけで、実は「神様の存在を疑い、試そうとしている」ということになります。もちろん、そういう風になってしまうのは、よくあることです。ただ、よくあることだからこそ、私たちには反省も必要であるということです。イエス様のように御言葉に基づいて「主を試してはならない」つまり、「疑ってはならない」というお手本を見ながら、自分の気持ちを振り返るのです。

そして、最後の誘惑です。とうとう、悪魔は全世界をくれてやるという究極の提案をします。しかし、冒頭言ったように、悪魔はタダではくれません。ここに来て、この悪魔の狙いが見えてきました。それは「イエスに自分を拝ませる」ということです。これは、つまり悪魔の誘惑に負けるということは、神様を離れて、神様ではない他のものを礼拝するということを意味しています。偶像崇拜への誘惑ということですね。私達も、神様を否定するような、拒絶するような、そんな強烈な誘惑に出くわした時、このイエス様のような決め台詞が言えたら、格好良いですね。申命記 6 章 13

節から引用されています。「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」と。「主に仕える」とは、言い換えるなら、神様に束縛されるということです。ある意味で、自由を放棄することですね。しかし、私たちが自由であるという時、本当に私たちは全ての事柄から自由なのかと言えば、それも定かではなく、先ほどからの誘惑の数々は、見えると見えざるを問わず、いつも私たちの周りにはあって私たちの自由を侵してきます。さもおまえを喜びで満たしてやろう、という雰囲気です。私たちが手を伸ばすよう誘っています。そして、魅力的なものに手を伸ばしたいと心揺れている時点で、すでに私たちはその主導権を奪われていると言えるでしょう。本当に自由に生きるためには、誘惑に負けない確かな信仰が欠かせません。それを今日の聖書箇所は、イエス様の御言葉は、教えてくれています。

賢い悪は、本当に身近に様々な誘惑の形を取って存在しています。私たちを神様から引き離そうと、自由に見せかけた欲望の虜にしようと、悪魔も悪魔で創意工夫し、鋭意努力していることでしょう。なので、私たちも「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」というイエス様の決意表明を思い出しながら、気を付けて参りたいと思います。そのための受難節でもあります。イエス様が誘惑された、葛藤された、渴望された。そのイエス様の苦い経験は、私たちの悲壮感を生み出すためではなく、私たちにより良い道を示されるために実現したのです。主の御受難の意味を間違えないようにしましょう。「イエス様、可哀そう」「痛々しくて見てられない」ではなくて、そこには、私たちの人生を支え、本当の幸せと自由に至るための教えが込められているのです。イエス様の苦しみは、私たちの学びです。その生涯を通して、命を懸けて、十字架に至るまで、私たちに教え導いてくださったイエス様の御苦しみに思いを馳せる、そんな受難節にしたいと願います。お祈りを致します。

神様。私達は今、あなたの大切な御子イエス・キリストの御受難を憶える、尊い日々を過ごして

います。イエス様の御苦しみは、私たちの感情を揺さぶるためではなく、私たちを教え導くために、あなたによって備えられたものと信じます。主の御受難を通して、この受難節を過ごす中で、より一層、あなたの御心に適う信仰者となれますように、私たちの心と歩みを導いてください。隣人との和解、世界の平和、自分と他者との幸せという、確かな理想を掲げつつ、そのために反省し、悔い改め、祈りつつ、なすべき行いを整えていくことができますように。少しでもイエス様の「お手本」に近づくことができますように。あなたのお支えと励ましを乞い願います。

このお祈りを大切なイエス様の御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。